受け継がれるつながり

遺跡を眺めてみると当時の人々の生活が浮き彫りになってきます。当時の人々のつながりや，時代を超えた人々の知恵が脈々と私たちに伝えられているのです。

また，人々は寄り添い，協力することで，厳しい自然とも向き合ってきました。このように，支え，支えられる大切さを私たちの祖先は教えてくれました。

私たちは未来へどのような「結ーゆいー」を示すことができるのでしょうか。

仙台市七郷地区の水田（平成24年9月撮影）

秋保の田植踊（馬場地区）

太白区秋保地区に伝わる豊作を願う踊りです。平成21年9月30日にはユネスコ（UNESCO）の無形文化遺産に登録されました。稲作は民俗芸能という形でも私たちの暮らしに根付いています。

❖ 略 年 表

時代区分		年 代	主なできごと
旧石器		約30000年前	市内で人が活動し始める（上ノ原山遺跡）
		約20000年前	山田上ノ台遺跡に石器製作跡、富沢遺跡にキャンプ跡が残される
		約13000年前	土器の製作・使用が始まる
縄文	草創期		野川遺跡に石器貯蔵跡が残される
	早期		土器の文様として縄文が定着する
	前期		六反田遺跡など平野部にもムラが営まれる
	中期		上野遺跡・高柳遺跡・山田上ノ台遺跡など大規模なムラがあらわれる
	後期		下ノ内浦遺跡・大野田遺跡で配石遺構がつくられる
	晩期	BC400年頃	大陸から稲作文化が伝わる
弥生	前期		東北地方で稲作が始まる
	中期		中在家南遺跡や押口遺跡、沓形遺跡など仙台平野で稲作が行われる
	後期		仙台平野を津波が襲う
		AD300年頃	邪馬台国の卑弥呼が魏に遣いを送る（239）
古墳	前期		戸ノ内遺跡、安久東遺跡で方形周溝墓がつくられる
	中期	400年頃	遠見塚古墳がつくられる
			南小泉遺跡で大規模な集落が営まれる
	後期	500年頃	大陸から須恵器生産などの先進技術が伝わる
			大蓮寺窯跡で須恵器の生産が行われる（5世紀中頃）
		600年頃	仏教が伝わる（538）
飛鳥	終末期（古墳時代）	645年	大化の改新
			郡山遺跡Ⅰ期官衙が造営される（7世紀中頃）
			郡山遺跡Ⅱ期官衙と付属寺院が造営される（7世紀末頃）

時代区分	年 代	主なできごと
奈良	710年	平城京へ都が移る
		陸奥国分寺・陸奥国分尼寺が造営される
平安	794年	平安京へ都が移る
鎌倉	1192年	源頼朝、征夷大将軍となる
		伊沢（留守）氏が赴任する
		岩切で定期的に市が開かれる（13世紀頃）
南北朝	1334年	建武の新政
		南北朝にわかれ対立する
室町	1338年	足利尊氏、征夷大将軍となる
	1392年	南朝と北朝が一つになる
		仙台市内各地に城館が造られる
安土桃山	1573年	織田信長が室町幕府を滅ぼす
	1590年	豊臣秀吉が全国を統一する
		伊達政宗、仙台城の縄張りを始める（1600）
江戸	1603年	徳川家康、征夷大将軍となる
		伊達政宗、若林城造営に着手（1627）
		伊達忠宗、仙台城二の丸造営に着手（1638）
明治	1868年	明治維新

※ は今回展示に関わる内容です。
※ は仙台市内の遺跡に関わる内容です。

発行：仙台市教育委員会文化財課　TEL：022-214-8893　　発行日：平成24年10月

仙台市文化財パンフレット第65集

結【ゆい】

コメづくりの始まりと暮らし

仙台市教育委員会

はじめに

仙台平野では，弥生時代の中頃（今から約2000 年前）には，水田による稲作が広く行われていたことが発掘調査により明らかになっています。特に東部地区からは，多くの遺跡が隣り合って発見されており，人や技術の交流，あるいは物資の移動など，色々なつながりをもっていたことが想定されます。

この時代のコメづくりは，現在からみても大変な苦労をともなう作業であったことが想像されます。たとえば道具作り。いくつかの遺跡からは，手作りの木製の農耕具が数多く発見され，その痕跡から，絶えず様々な工夫を凝らしてきたことを知ることができます。

およそ昭和30 年代頃まで，多くの農村では「結ーゆいー」という農作業の助け合いが行われていました。仙台では「よい」とも呼ばれ，特に田植えや稲刈りなど，短期間に大勢の人手が必要な時に手伝う慣習が長く続いていました。

「結ーゆいー」がいつから行われてきたのかは必ずしも明らかではありませんが，ここでは弥生時代の農業においてもこのような人々のつながりにより助け合う姿があったのではないかという視点で，発掘調査の成果を紹介しております。

このような人と人との“心のつながり”に加えて，過去と現在の“時のつながり”も「結ーゆいー」という言葉で表してみました。こうした人と人とのつながり（絆），助け合い（共助）は私たち日本人の美徳の一つであり，誇りではないでしょうか。

仙台平野東部の主要遺跡（弥生時代～古墳時代）

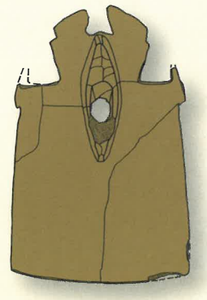
①南小泉遺跡　②遠見塚古墳　③中在家南遺跡
④押口遺跡　⑤沓形遺跡　⑥藤田新田遺跡
⑦高田Ｂ遺跡　⑧今泉遺跡

2000年前のコメづくりの道具たち

朝鮮半島から海を越えて日本列島にもたらされた稲作の技術は，弥生時代の中頃には東北地方の各地に広まりました。冬は長く厳しい寒さが続き，夏は冷涼な「やませ」と呼ばれる風が吹く東北地方の太平洋沿岸部は，他の地域と比べてコメづくりが難しい地域といえます。弥生人たちは工夫を重ねながら，稲作を続けて行きました。

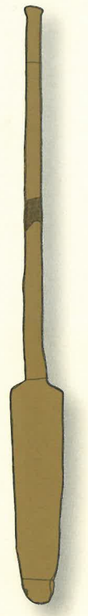
コメづくりは，その各段階に応じて様々な道具を必要とします。仙台平野東部の遺跡では，弥生時代に使われた農耕具が数多く出土しています。

たがやす　そだてる　かりとる



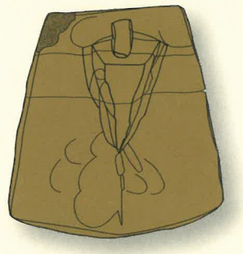
▲広鍬（中在家南遺跡　弥生時代）

春のはじめ，まず鍬や鋤を使って田の土を掘り起こし，コメづくりの準備を行います。これは広鍬とよばれる鍬で，まん中にあいた穴に柄を差し込んで使用します。



▶平鋤（中在家南遺跡　弥生時代）

田起こしに用いられた道具で，スコップのように先が幅広い形をしています。

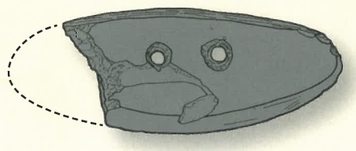


▼泥除け（中在家南遺跡　弥生時代）

ぬかるんだ水田を耕す際，人に泥が跳ね返るのを防ぐためのものです。鍬に取り付けて使用しました。

▲一木刈払い具（中在家南遺跡　弥生時代）

長い柄を持ち，先がやや幅広く，縁辺は刃のように削られています。ゴルフクラブのように振り下ろし，雑草の草刈りや，収穫後の田に残る稲の茎の処理などに使用した道具ではないかと考えられています。



▲石庖丁（中在家南遺跡　弥生時代）

秋，たわわに実った稲穂を一本ずつ摘み取るのに使用した道具です。この刈り方を穂首刈りといいます。ふたつ空いた穴にひもを通し，指にかけて固定して使いました。

▼大型板状石器（中在家南遺跡　弥生時代）

直接手に持ち，収穫後の稲を根本からを刈り取るのに使用したと考えられています。

コメをつくる～沓形遺跡の水田跡～

沓形遺跡では，弥生時代中頃（約2000年前）の水田跡が発見されました。水田跡は，東西約300m，南北約1200m，面積約20haの広い範囲に及ぶことが明らかになりました。水田一区画の面積は今より小さく，16～25㎡でした。

今から約2000年前，ここには水田が広がり，コメをつくる人々の姿があったのです。

沓形遺跡（第１次調査）から発見された水田の区画と水路

農具をつくる～中在家南・押口遺跡の河川跡～

中在家南遺跡と押口遺跡からは，連続すると考えられる川の跡から，農具を中心とするたくさんの木製の道具が出土しています。

この川のすぐ近くにはムラがあり，ムラの中で人々が様々な道具をつくったり，田んぼに仕事へでかけたりと，――そんな姿が想像されます。

未完成の竪杵（中在家南遺跡　弥生時代）

竪杵（中在家南遺跡　弥生時代）

未完成の鍬（中在家南遺跡　弥生時代）

未完成の泥除け（押口遺跡　弥生時代）

ムラの暮らし～南小泉遺跡の集落跡～

南小泉遺跡からは，多くの発掘調査のなかで，弥生時代の各時期の土器や石器が発見されています。ここには，弥生時代を通じて人々が生活していたことが考えられます。遺跡のなかには，弥生時代中頃の土器や石器が多数発見された場所があり，住居があったと推定されます。

出土した土器の種類や，土器についたコゲの痕から，コメを煮炊きして食べる生活が始まったことがうかがえます。

煮炊きをする

甕（南小泉遺跡　弥生時代　東北大学大学院文学研究科所蔵）

たくわえる

壺（南小泉遺跡　弥生時代　東北大学大学院文学研究科所蔵）

盛る

高坏（南小泉遺跡　弥生時代　東北大学大学院文学研究科所蔵）

ムラを行き交う人びと～いくつもの遺跡をつなぐもの～

南小泉遺跡の近くにある中在家南遺跡，押口遺跡からは，弥生時代の同じ時期の土器が発見され，同じ頃に人々が生活していたことが分かりました。人々が活発に行き交い，ムラどうしが深い関わりをもっていたと考えられます。

鉢（中在家南遺跡）

鉢（押口遺跡）

鉢（中在家南遺跡）

甕（中在家南遺跡）

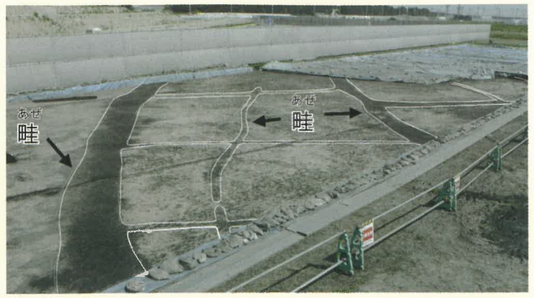
高坏（中在家南遺跡）

中在家南遺跡と押口遺跡から出土した弥生土器

弥生時代の津波痕跡

津波被害を受けた水田

沓形遺跡の発掘調査の結果，約2000年前の弥生時代の水田を覆う砂の層が発見されました。この砂は当時の津波によって海から運ばれてきたものであると考えられます。

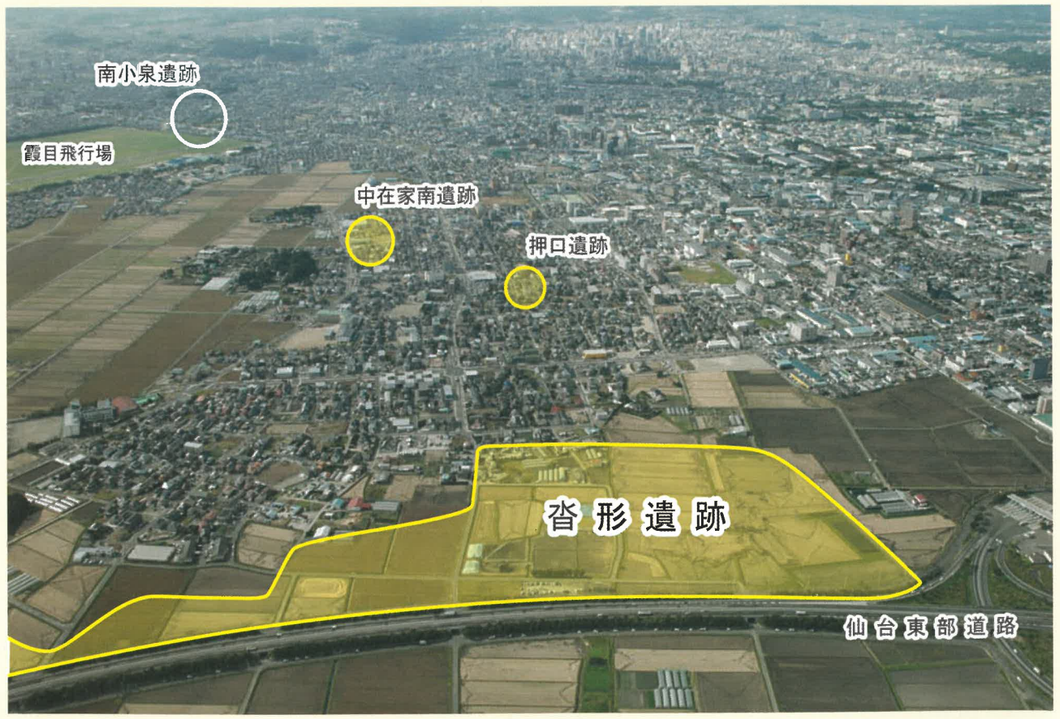


沓形遺跡（第3次調査）**で確認された弥生時代の水田跡**
白く見える部分が水田を覆う砂です。

空白の数百年

津波後の数百年間，沓形遺跡では水田が復旧した様子は無く，この地域に広く営まれていた水田が，全て津波被害によって廃絶されたことが分かりました。

同じく中在家南遺跡や押口遺跡でも，弥生時代中頃以降，一旦人々の生活の跡が途絶えます。これはなぜでしょうか。おそらく津波被害を受けなかった土地を求めて，人々は内陸部などへ移っていったのだろうと考えられます。



東側から見た各遺跡の位置関係

その後，再び生活の跡が見られるようになるのは，約300年後の古墳時代前期頃です。その頃になると沓形遺跡では，再び水田がつくられ，中在家南遺跡や押口遺跡では，木製農具の製作が再開されます。

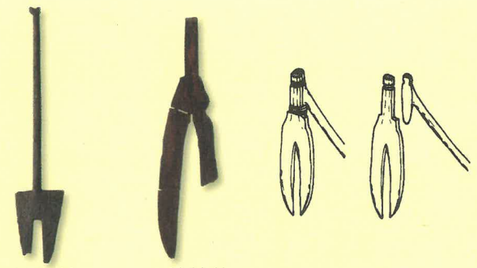
仙台平野の中心地へ

直接津波被害が及ばなかった南小泉遺跡周辺では，弥生時代を通して集落が営まれました。

この地域では，安定した社会基盤をもとに引き続きムラが営まれました。その後，古墳時代になると，そのようなムラを含め，広い地域を治めていく首長が現れ，遠見塚古墳をはじめとする大きな墓を造るようになっていきます。

復元整備された遠見塚古墳

古墳の規模は，全長110m，後円部の直径は63m，前方部の長さは47mです。東北地方でも有数の実力を持った首長と考えられています。



二又鋤（押口遺跡・古墳時代前期）　**二又鍬**（中在家南遺跡・古墳時代前期）　**二又鍬の装着方法**

仙台市内で出土した古墳時代の木製品の中に，鍬や鋤（スコップ）があります。古墳はこのような木製の道具で築かれたと考えられます。

遠見塚古墳に埋葬された豪族を首長とする古墳時代のムラは，その後も奈良・平安時代の集落として営まれ続けます。奈良時代中頃には南小泉遺跡の北に隣接して陸奥国分寺・国分尼寺がつくられ，この地域が陸奥国の中で重要な役割を担っていたことが分かっています。また，中世には武士の城館が，近世には若林城の城下町がつくられるなど途絶えることなく発展し，現在につながっているのです。

陸奥国分寺跡復元模型

奈良時代，聖武天皇の詔により全国に国分寺・国分尼寺がつくられました。若林区木ノ下の陸奥国分寺，白萩町の陸奥国分尼寺は全国でも最北の国分寺・尼寺です。

若林城跡（現宮城刑務所　平成17年撮影）

伊達政宗が60歳を過ぎてからの晩年の居城として若林城をつくり，移り住みました。

若林城は政宗の死後には廃城となり，多くの建物が仙台城二の丸へ移築されています。